

| 教 育 研 究 業 績 書 | | |
|-------------------------|---------------------|--|
| 令和5年5月1日 | | |
| 氏名 中田 久恵 印 | | |
| 研 究 分 野 | 研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド | |
| 看護学 | 子育て支援、性教育、看護基礎教育 | |
| 教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項 | | |
| 事項 | 年月日 | 概 要 |
| 1 教育方法の実践例 | | |
| 基礎看護学実習Ⅰ | 令和元年5月～毎年（5日間）現在に至る | 看護学科1年生の8～10名に対し、病院施設での早期体験学習の引率および看護学を学ぶ動機付けおよび今後の学習における学生各自が自らの課題を明確にできるように指導した。 |
| 情報と看護展開Ⅱ | 令和元年9年～令和3年 | エビデンスに基づいた看護実践のため、4つのペーパーベースメント事例をもとにグループワークで展開する授業を行った。4つの事例のうち1つの事例を担当し作成、解説等を行った。 |
| 健康教育演習 | 令和元年4月～令和5年 | 青年期の性感染症をテーマにしあ演習事例の提示、グループワークの指導、まとめの講義の一部を行った。 |
| 情報と看護展開Ⅲ | 令和元年4月～令和5年 | 「地域と国際看護」をテーマとして、産後1か月の母子とその家族における看護課題と支援を考えるために、エビデンスベースの事例を作成し、演習を行った。事例を提示し解説、テストを実施した。 |
| 生涯発達における援助技術 | 令和元年4月～令和5年 | 成人高齢者、精神、小児、母性の看護領域における援助技術のオムニバス形式の演習科目であり、母性看護に主として携わり、科目責任者として試験等のとりまとめを行った。 |
| 母性看護援助 | 令和2年9月～現在に至る | 母性看護学における産褥期、新生児期の生理特徴および看護について、教科書や視覚教材を活用しながら、講義を行った。また、リプロダクティブヘルスや看護展開のグループワークの指導を行った。 |
| 看護課題の探求（通年科目） | 令和3年4月～現在に至る | 母性看護学領域の教員3名と共に、担当境域希望の学生（主として担当2名）の指導にあたった。看護課題の探索を支援し、実習で得られたデータの振り返りと発表まで指導を行った。 |
| 看護展開統合演習（通年科目） | 令和3年4月～現在に至る | 統合演習の課題作成、グループワークでの支援、テスト作成・解説を行った。 |
| 統合実習 | 令和3年7月～現在に至る | 看護課題の探求で学生自身が計画した実習計画に基づき、看護課題の探求のための臨地実習指導を行った。 |
| 看護学セミナー（講義） | 平成24年11月～平成31年3月 | 講義・実習で学んだ周産期における看護を中心に、思春期、更年期といった女性のライフサイクルの特徴の理解に必要な知識を再確認し、女性に対する看護の理解を深める目的で、スライド、資料を作成し、講義を行い国家試験対策に繋がるように工夫を行った。 |
| 母性看護学実習指導 | 平成24年5月～現在に至る | 出産数の減少、産科病棟の縮小などの影響により、産科病棟実習日数が限られる昨今、外来実習、地域の保健センター、子育て支援センターなどの母親学級の見学および産婦人科クリニックでの見学実習を行えるように施設の開拓を行った。周産期および女性のライフサイクル各期における健康問題に対する継続的な支援の必要性和重要性を教授している。 |
| 基礎看護学、総合実習指導 | 平成24年12月～令和元年3月 | 看護学の基礎なる実習、および看護の知識と技術の統合となる総合実習指導を行い、多領域での実習指導と可能である。 |

| | | |
|---|------------------------|---|
| 病態治療論Ⅰ（講義） | 平成26.27年9.10月 | 病態治療論において、疾患の病態生理および治療に関する講義を医師が行い、それらに対する看護について講義を行い、学生にとって看護の視点から病態をとらえられる講義を行った。 |
| 2 作成した教科書、教材 母性看護学実習要項 | 平成25年4月～令和元年3月 | 外来実習、課題実習の内容、実習記録などの改訂を領域の教員と共に年次毎に行っている。 |
| 母性看護学援助論（育児支援パンフレット・技術演習手順書） | 平成25年4月～令和元年3月 | 母性看護学の授業なかで、土浦市、つくば市、牛久市、守谷市における育児ソーシャルサポートの内容をまとめ、小冊子に製本し、授業内および4年次の母性看護学実習で活用している。 |
| 看護学実習共通要項 | 平成27年3月～令和2年3月 | 臨地実習においてどの領域においても共通理解が必要な事項等について、まとめ冊子を作成した。 |
| 実習経験録 | 平成27年3月～平成28年2月 | 4年生の経験録の看護技術の卒業時到達レベルや経験技術項目について、小冊子を作成、学生自身が看護援助技術についての振り返りや課題を明確にできるように工夫した。 |
| 3 教育上の能力に関する大学等の評価 つくば国際大学授業評価アンケート結果 | 平成24年～ | 母性看護学援助論の授業について学生からの授業評価アンケート結果は、平成24年度より年々評価が上昇している。平成26年度後期のアンケート結果においては、すべて項目において、学科専攻科目の平均を上回った。特に”教員の授業展開”授業は学生の理解度を把握しながら進めていたか2の項目については4.41、4.18（5ポイント：リッカート式）であり、顕著な上昇がみられ、効果的な授業が展開できている。 |
| 4 実務の経験を有する者についての特記事項 | | |
| 5 その他 | | |
| 茨城県筑西市思春期保健事業 親子性教育（講師） | 令和4年9月～現在に至る | 市と教育委員会が主催している「小学校3年生の親子に対する親子性教育」において、生徒対象の授業と授業後の保護者への講和を計5か所の小学校で行った。 |
| ・第19回FDフォーラム参加（京都） | 平成26年2月 22.23日 | 「社会を生き抜く力を育てるために」シンポジウム1：京都発地域まるごと学習コミュニティ共に育ち共に学び合う社会をつくる一、第7分科会「授業アンケートと教育の個性化」に参加する。 |
| ・第19回FDフォーラム報告会における発表 | 平成26年6月5日 | ”シンポジウム1”については、看護学科伊藤智子助教と共にスライドを作成し「大学のまち京都・学生のまち京都の推進」「地域に根差した教育研究による地域工学系人材の育成にむけて」「京都学生祭典×地域の取り組みについて」「地（知）の拠点整備事業について」の概要を報告した。第7分科会においては「授業アンケートが私達を変える、私達が授業を変える」「建学の精神”礼節・勤労”に基づいた新たな質保証システムの構築」「授業評価アンケートから授業アンケートへ」「教育の内部質保証システムと授業アンケートの関係構築」についての内容をスライドにまとめ報告した。 |
| ・医療保健学部授業報告会「看護学科におけるチーム医療に関する教育について」資料作成 | 平成26年8月28日 | 看護学会内において「チーム医療」に関する授業内容のアンケート調査を科目担当者に行い、集計結果を報告した。一貫して「チーム医療」を扱う科目はなかったが、看護の8領域すべてにおいて何らかのかたちで「チーム医療」について教授しているということが明らかになった。 |
| 職 務 上 の 実 績 に 関 する 事 項 | | |
| 事項 | 年月日 | 概 要 |
| 1 資格、免許 看護婦免許取得 助産婦免許取得 | 平成4年6月30日 平成5年4月23日 | 免許番号 773301 免許番号 97378 |

| | | |
|--|-----------|--|
| 2 特許等 なし | | |
| 3 実務の経験を有する者についての特記事項 | | |
| 4 その他 ニューベール財団研究助成 調査研究報告書「健やかで心豊かな社会を目指して」東 日本大震災被災妊婦に対する地域連携・協働による遠隔 的支援方法の構築（研究分担者） | 平成27年3月完了 | 本研究は、東日本大震災被災地への遠隔地から被災地母子支援施設への継続した支援方法として、IT活用による支援体制の構築を行うことを目的とする。研究対象は、NPO「母と子の虹の架け橋」の実施施設、釜石市「ママハウス」スタッフ4名、「タブレット相談」の相談者1名である。研究方法は、「タブレット相談」実施後に半構成面接により、タブレット端末の機器の操作に関すること、専門職による支援について、今後専門職に臨むことについて聞き取りを行った。分析方法は、内容の質的分析の手法を用い、データをコード化し意味内容の同質性・異質性に基づいて分類した結果、【タブレット端末の利用】【被災地の母子ケア不足】【継続支援への期待】【支援者・スタッフ・相談者の信頼関係の必要性】【相談における事前準備】【広報の手段】【施設利用者のニーズの変化】の7つのカテゴリーを抽出した。[大槻優子、川名ヤヨ子、中田久恵] |
| 科研費 研究課題/領域番号 24660015 研究種目：挑戦的萌芽研究 「東日本大震災被災妊婦に対する地域連携・協働による遠隔的支援方法の構築」（研究分担者） | 平成27年3月完了 | 東日本大震災で被災した妊婦とその家族が、新たな環境に適応していくための母子保健サービスについての基礎的研究として、被災地の病院（助産師）、地域（保健師・NPO・助産師）、大学（教育機関）との連携および協働による遠隔的支援方法の可能性を明らかにすることと、その方法論を模索することを目的とする。 研究1：被災妊婦の被災直後から1年間におけるストレス反応と母子支援のニーズの把握および課題の分析。研究2：被災後における地域（被災地の行政・保健師・助産師・NPO）、病院（施設・助産師）、大学（研究機関）による母子支援の遠隔的な連携・協働の可能性の検証。研究3：地域・病院・大学における試験的な遠隔的母子支援プログラム作成と実施およびその結果の分析。研究4：試験的な遠隔的母子支援プログラムの評価と地域・病院・大学との連携・協働による遠隔的な母子支援モデル構築までの要因と道筋の検討を行った。[大槻優子、川名ヤヨ子、中田久恵] 担当部分：共同研究のため抽出不可 （研究3、研究4において、地域と大学の遠隔的支援（IT活用）の実施と評価を行った） |
| 科研費 研究課題/領域番号 24660015 研究種目：挑戦的萌芽研究 「東日本大震災被災妊婦に対する地域連携・協働による遠隔的支援方法の構築」（研究分担者） | 平成27年3月完了 | 東日本大震災で被災した妊婦とその家族が、新たな環境に適応していくための母子保健サービスについての基礎的研究として、被災地の病院（助産師）、地域（保健師・NPO・助産師）、大学（教育機関）との連携および協働による遠隔的支援方法の可能性を明らかにすることと、その方法論を模索することを目的とする。 研究1：被災妊婦の被災直後から1年間におけるストレス反応と母子支援のニーズの把握および課題の分析。研究2：被災後における地域（被災地の行政・保健師・助産師・NPO）、病院（施設・助産師）、大学（研究機関）による母子支援の遠隔的な連携・協働の可能性の検証。研究3：地域・病院・大学における試験的な遠隔的母子支援プログラム作成と実施およびその結果の分析。研究4：試験的な遠隔的母子支援プログラムの評価と地域・病院・大学との連携・協働による遠隔的な母子支援モデル構築までの要因と道筋の検討を行った。[大槻優子、川名ヤヨ子、中田久恵] 担当部分：共同研究のため抽出不可 （研究3、研究4において、地域と大学の遠隔的支援（IT活用）の実施と評価を行った） |

| | | |
|--|---------------|--|
| 科研費 研究課題/領域番号 20K11000 研究種目：基盤研究（c） 「子育てに関するヘルスリテラシーの獲得を基盤とした子育て支援モデルの構築」（研究分担者） | 令和2年4月～令和5年3月 | 1歳半までの子育て期にある母親ルスリテラシーの獲得について、促進要因、阻害要因も含め明らかにすることを目的とする。獲得過程を質的に分析し、その後、量的に検証を行いより有効性の高い子育て支援モデルの提案を行う。[村井文江、坂間伊津美、中田久恵、南雲史代] |
|--|---------------|--|

研 究 業 績 等 に 関 する 事 項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称 | 概 要 |
|---|---------|-----------|--------------------------------|--|
| (著書) 1 看護判断のための気づきとアセスメント 母性看護 | 共著 | 令和4年2月 | 中央法規 | エビデンスに基づいた看護計画につなげるための「アセスメント力（臨床判断）」を高める若手看護師・看護学生のためのシリーズの母性看護の第4部執筆。[茅島江子、村井文江、細坂泰子 編集] ISBN:978-4-8058-8434-8 |
| (学術論文) 1 離乳を通して獲得される初産婦の母親役割能力 (修士学位論文) | 単著 | 平成20年3月 | 筑波大学大学院人間総合科学研究科看護学専攻 pp. 1-50 | 離乳期を通しての母親役割能力獲得のプロセスの仮説的なモデル構築を目的に、離乳を通して母子の相互作用の現象から、この過程で獲得していく母親役割能力を明らかにするため、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを研究デザインとし、研究を行った。1歳前後の第一子の乳児を持つ初産婦の母親24名を対象とし、半構造的面接を行った。母親の語りを分析した結果、離乳を通して母親は自分を成長させる過程において、コアカテゴリーの【自分の子どもを理解する】という母親役割能力を中心に、その他6つのカテゴリーが抽出された。離乳開始以前の【離乳に対する捉え方】をもち、【判断材料を集める】、【判断材料を使いこなす】、【自分と子どもの歯車をあわせる】、【寛容な判断】ことを行いつつ、戻りつつしながら段階的に進むことで、maternal identityは成長し続け、また母親役割能力が社会化していくことが明らかになった。 |
| 2 初めて育児をする母親が離乳を通して母親役割を獲得していくプロセス—離乳後期における母親役割獲得の質的研究— | 共著 | 平成25年4月 | 日本母性衛生学会、母性衛生、第54巻1号 pp. 69-77 | 離乳という育児を通して獲得される母親役割のプロセスを明らかにすることである。離乳後期にある第一子を育てている母親24名に面接調査を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。 母親が離乳という育児を通して母親役割を獲得するプロセスにおいて、【離乳に対する構えをもつ】 【判断材料をそろえていく】 【判断材料を使いこなす】 【自分と子どもの歯車をあわせる】 【心のあそびをもつ】 【自分の子どもがわかる】 【母親としての構えが大きくなる】 の7つのカテゴリーが抽出された。これらのカテゴリーは、Mercerの母親役割獲得の予期的段階、非形式的段階、形式的段階、個人的段階の内容に一致していた。【自分の子どもがわかる】は、コアカテゴリーであり、離乳を通しての母親役割獲得の順調さに関連すると同時に、母親役割獲得の個人的段階を充実させていた。 母親たちは、妊娠から産褥、その後の育児を通して獲得してきた母親としての自分(maternal identity)を、離乳を通してさらに成長させていると考える。 [中田久恵、村井文江、江守陽子] 担当部分：計画から執筆まで主担当として行った。 |

| | | | | |
|--|----|---------|----------------------------------|--|
| 3 母性看護学実習における学生 の技術経験状況調査 | 共著 | 平成26年3月 | つくば国際大学紀要、医療保健学研究、第5号 pp.129-139 | 母性看護学実習を履修した4年生66名を対象に母性看護学実習における82項目の看護技術経験状況を分析した。その結果、60%以上の学生が経験できた項目は、妊娠期の項目「子宮底・腹囲測定」「レオポルド触診法」分娩期の項目「胎児心拍・陣痛の観察」「胎盤の観察」産褥期の項目「子宮底の測定」「乳頭・乳房の観察」「浮腫の観察」「悪露の観察」であった。新生児期の経験項目は経験割合が高く「新生児の観察」の全ての項目で90%以上の学生が経験した。学生の性別の違いによる経験項目では、分娩期、産褥期の項目で女子学生の方が経験率が高く、新生児期の経験率は男子学生の方が高かった。[中田久恵、大槻優子] 担当部分：看護技術経験調査書の作成段階から分析、論文執筆まで行った。 |
| 4 大学教員とIBCLC（国際ラクテーションコンサルタント）助産師による母乳育児支援の授業からの学び | 共著 | 平成27年3月 | つくば国際大学紀要、医療保健学研究、第6号 pp.57-68 | 大学教員と実習指導者による母乳育児の演習における効果を明らかにするために、看護学科3年次の母乳育児支援の演習に出席した学生70名を対象にした演習後のレポートの内容分析を行った。内容分析から【妊娠中からの継続的な知識提供の必要性】【ポジショニングとラッチオンの重要性】【母親の自信につながる具体的支援方法】【母親としての疑似体験】【自己の母乳育児への意欲】【具体的なコミュニケーションスキルの気づき】【看護職者としての理想像の明確化】【母親・家族への感謝への気持ち】の8つのカテゴリーが抽出された。授業の効果として、母乳育児を身近にとらえ、具体的な援助方法の取得をすることが出来ていた。近年、少子化や実習施設の減少による臨地実習での経験が減少している看護基礎教育において、効果的な授業方法であったと言える[中田久恵、大槻優子、瀬瀬祐子、高橋弥生、山田千恵] 担当部分：演習の実施とデータ分析を共同研究者と行い、執筆を主担当として行った。 |
| 5 遠隔地から被災地母子支援施設への継続した支援方法としてIT活用による支援体制の構築 | 共著 | 平成27年3月 | 科研費 挑戦的萌芽研究（報告） 2012-2014 | 東日本大震災で被災した妊婦とその家族が、新たな環境に適応していくための母子保健サービスについての基礎的研究として、被災地の病院（助産師）、地域（保健師・NPO・助産師）、大学（教育機関）との連携および協働による遠隔的支援方法の可能性を明らかにすることと、その方法論を模索することを目的とする。 研究1：被災妊婦の被災直後から1年間におけるストレス反応と母子支援のニーズの把握および課題の分析。研究2：被災後における地域（被災地の行政・保健師・助産師・NPO）、病院（施設・助産師）、大学（研究機関）による母子支援の遠隔的な連携・協働の可能性の検証。研究3：地域・病院・大学における試験的な遠隔的母子支援プログラム作成と実施およびその結果の分析。研究4：試験的な遠隔的母子支援プログラムの評価と地域・病院・大学との連携・協働による遠隔的な母子支援モデル構築までの要因と道筋の検討を行った。[大槻優子、川名ヤヨ子、中田久恵] 担当部分：研究3、研究4において、地域と大学の遠隔的支援（IT活用）の実施と評価を行った。 |

| | | | | |
|--------------------------------------|----|---------|--|---|
| 6 東日本大震災被災妊婦に対する地域連携・協働による遠隔的支援方法の構築 | 共著 | 平成27年3月 | ニューベール財団調査研究報告書「健やかで心豊かな社会を目指して Vol. 23」CD-ROM | 本研究は、東日本大震災被災地への遠隔地から被災地母子支援施設への継続した支援方法として、IT活用による支援体制の構築を行うことを目的とする。研究対象は、NPO「母と子の虹の架け橋」の実施施設、釜石市「ママハウス」スタッフ4名、「タブレット相談」の相談者1名である。研究方法は、「タブレット相談」実施後に半構成面接により、タブレット端末の機器の操作に関すること、専門職による支援について、今後専門職に臨むことについて聞き取りを行った。分析方法は、内容の質的分析の手法を用い、データをコード化し意味内容の同質性・異質性に基づいて分類した結果、【タブレット端末の利用】【被災地の母子ケア不足】【継続支援への期待】【支援者・スタッフ・相談者の信頼関係の必要性】【相談における事前準備】【広報の手段】【施設利用者のニーズの変化】の7つのカテゴリーを抽出した。[大槻優子、川名ヤヨ子、中田久恵] 担当部分：タブレット相談の実施、インタビュー内容の質的分析を行った。 |
| 7 農村地域における在宅介護の実態—茨城県T町の事例— | 共著 | 平成28年3月 | 岩手公衆衛生学会誌, 第28巻, 第1号 24-25 | 農村地域の在宅介護の実態と課題を明らかにし、遠隔地における専門職の役割と具体的な支援方法を検討する目的で、T町で65歳以上の方を在宅で介護した経験がある方を対象に、無記名式質問紙による調査を行った。タウンメールを利用し2993戸に配布、回収率は8.7%であった。その結果、在宅での介護は、女性方法が男性に比較して多く、年代別には60歳以上が約8割であった。2割の方が介護サービスを利用しておらず、「人の世話になりたくない」「サービスの利用方法がわからない」などの理由があげられた。必要な介護サービスの提供と介護保険制度の知識や利用方法などの情報提供の工夫が必要であることが明らかになった。[大槻優子、仲根よし子、中田久恵、武敏子、渡邊昌宏、瀧瀬祐子、島貴秀樹] 担当部分：調査準備と分析を担当した。 |
| 8. 男子学生の母性看護学実習開始時における心理状態に関する研究 | 共著 | 平成29年4月 | 日本医学看護学教育学会 第26号No.1 22-26 | 本研究は、母性看護学実習開始時における男子学生の心理状態を明らかにし、具体的にどのような指導が必要であるか、その方法を検討するための基礎資料を得ることを目的とした。看護学科4年生男子13名を対象に実習開始時に半構造的面接方によりデータを収集し、質的帰納的に分析した。その結果【男性であることを意識した感情】【分娩に対する抵抗感】【母性看護学実習に頂く困難感】【母子の看護に対する不安】【母性看護学実習への期待感】【学生自身の経験からくる肯定的感情】の6つのカテゴリー抽出された。[瀧瀬祐子、中田久恵、大槻優子] |
| 9. 妊娠期と産後1か月の母親のQOLに影響する要因の質的分析 | 共著 | 平成29年6月 | 小児保健研究, 76巻, 1号 33-45 | 本研究の目的は、出産前後の母親のQOLに影響する要因を具体的に示し、量的分析では明らかにできなかった要因を明らかにすることである。その結果、妊娠期のQOLに影響する要因は【妊婦の心の安定】【妊婦の健康状態】【夫の積極的な支援】【整った生活環境】【両親（同胞）の支援】の5つのカテゴリーであった。産後1か月では【母親の心の安定】【母子の健康状態】【夫の支援】【実母の支援】【生活環境の調整】【同胞・ピアの支援】の6つのカテゴリーに集約された。[野原真理、中田久恵] |

| | | | | |
|---|----|---------|--|---|
| 10. 農村過疎地域における在宅介護の実態・介護サービスに視点をあてて | 共著 | 平成30年3月 | 日本農村医学会雑誌、第67巻第1号20-27 | 本研究は農村過疎地域における在宅介護の実態と課題を明らかにし、専門職の役割と具体的な支援方法を検討するための基礎資料を得ることを目的とした。タウンメールで65歳以上の方を在宅で介護した経験がある方を対象とし無記名式質問しによる調査を行った。利用している介護サービスのなかで通所介護、短期入所生活介護は半数以上の方が利用していた。今後の課題として、農村過疎地域で在宅看護を可能にするためには、必要な介護サービスを有効に活用することが重要であり、専門職として介護保険成語についての知識や利用方法など理解しやうしような情報提供の工夫が必要と考える。[大槻優子、仲根よし子、中田久恵、島貫秀樹、額額祐子、武敏子、椎名清和] |
| 11. 農村過疎地域における在宅介護の実態・性差による介護サービスの満足に関する要因 | 共著 | 平成31年1月 | 日本農村医学会雑誌、第67巻第5号20-27 | 農村過疎地域における在宅介護の実態として、介護サービスの満足に関する要因を、介護者の男女差の視点から明らかにすることを目的とした。介護サービスの満足度の結果、介護者の52.3%が利用した介護サービスに満足しており、性別と満足度の関連性はみられなかった。[中田久恵、仲根よし子、大槻優子] |
| 12. 農村過疎地域における女性家族介護者の在宅介護の実態 在宅看護の継続要因の分析 | 共著 | 令和元年7月 | 日本農村医学会雑誌、第68巻第2号164-173 | 65歳以上の要介護の方を介護した経験のある女性5名にインタビューを行いその結果を内容分した。その結果、専門職が支援すべき特徴が明らかになった。[仲根よし子、中田久恵、大槻優子] |
| 13. 母親のQOLと育児不安 産後1か月、6か月、12か月の縦断的研究から | 共著 | 令和元年7月 | 日本小児保健協会、第78巻第4号305-314 | 第1子の乳児をもつ母親のQOLと育児不安の実態を縦断的にアンケートとインタビューの結果から分析した。育児不安の項目”育児で心配なこと”は、月齢が進むにつれてその人数は徐々に減少しているが、QOLの高低間で有意差はみられなかった。[野原真理、中田久恵] |
| 14. 小学3年生親子性教育 「命の誕生」活動報告 | 共著 | 令和元年5月 | 常磐大学看護学研究雑誌 第5巻 実践報告 45-53 | 茨城県A市内全小学3年生を対象とした親子性教育の活動報告と親子性教育直後の保護者へのアンケート調査結果を報告した。[南雲史代、中田久恵、村井文江] |
| (その他) 「学会発表」 1 死産を経験した母親への分娩施設における看護支援ー茨城県での実態調査ー | - | 平成20年9月 | 第23回日本助産学会学術集会 (東京) ポスター発表 (抄録pp. 150) | 茨城県内で施設内分娩を行っている病院・診療所全67施設を対象に、死産における看護支援状況の調査を無記名自記式質問紙を配布し回答を得たもの (回収率34.3%)の分析をし、その結果を報告した。[能町しのぶ、小木千代子、中田久恵、西出弘美、山本梨花、村井文江] |
| 2 修正版グラウンデッドセオリーアプローチを用いて分析した離乳における初産婦の母親役割獲得のプロセス | - | 平成21年9月 | 第50回日本母性衛生学会総会 (横浜) ポスター発表 (学術集会抄録集 pp. 248) | 生後6~12か月の子どもをもつ初産婦の母親が育児課題である離乳をとおして獲得する母親役割獲得のプロセスを修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析し、その結果を報告した。[中田久恵、村井文江] |
| 3 快適な妊娠生活のために妊娠期の情勢がしているメンタルヘルスカケア | - | 平成24年5月 | 第26回日本助産学会学術集会 (札幌) ポスター発表 (学術集会抄録集 pp. 197) | 妊娠・出産・育児を体も心も安定した状態で過ごすことを支援する「周産期メンタルヘルスプログラム」開発のためのニーズアセスメントとして、妊娠期にある女性が安定したメンタルヘルスを保つためにしている事柄を半構造化面接方法でデータを収集し、グラウンデッド・セオリー・アプローチで分析した。その結果、妊娠期の女性は、【思い通りにならないことを実感する】を改善し、自分の望む妊娠生活に近づけるために、自分のもっている資源を最大限に地用して、【変化を乗り越える】ことをしていた。そして【妊娠を自分のものにする】ことに至っていたことが明らかになった。[村井文江、中田久恵] |

| | | | | |
|--|---|----------|---|--|
| 4 母性看護学実習における学生技術経験状況調査 | - | 平成26年9月 | 第55回日本母性衛生学会総会（幕張）ポスター発表（学術集会抄録集 pp. 228） | 母性看護学実習を履修した4年生を対象に母性看護学実習における看護技術経験チェックリストを作成し、その集計を分析した。その結果を報告した。[中田久恵、大槻優子] |
| 5 被災地の母子支援施設に対する遠隔地からの継続的支援方法の検討—ICT活用による現地スタッフのサポートの試み— | - | 平成26年11月 | 第18回茨城県総合リハビリテーションケア学会（土浦）ポスター発表（第23巻学術集会特別号 pp. 28） | 東日本大震災の被災地への継続的支援方法を検討するために、NPO法人母子支援施設のスタッフ9名を対象に質問紙調査を行った。調査結果から、NPO法人母子支援施設のスタッフは、被災地での母子支援にやりがいを感じているが、「子どもの成長発達」や「病気・けがなどの対処方法」についての知識が十分でなく、困難を感じていた。研究者らは看護の専門職であることからスタッフへの支援が可能であると考えた。具体的な方法は、「タブレット」を使用した事業所と大学の遠隔相談事業を実施した。[大槻優子、川名ヤヨ子、中田久恵] |
| 6 The Effect of Unification Approach by University Lecturer and Practce Leader:From a Breastfeeding Coaching Class By IBCLC Midwife（和訳：「大学教員と臨床指導者による母乳育児演習による効果」） | - | 平成27年7月 | 第11回ICMアジア太平洋地域会議・助産学術集会（横浜）ポスター発表（Program & Sbstract Book pp. 227） | 大学教員とIBCLC(国際ラクテーションコンサルタント)の資格をもつ実習指導者による母乳育児の演習における効果を明らかにすることを目的とし、演習後の学生のレポートを質的研究方法で分析した。その結果を報告した。[中田久恵、大槻優子、額額祐子、高橋弥生、山田千恵] |
| 7 遠隔地からの被災地母子支援施設へのタブレット型多機能携帯端末使用による健康相談の試み | - | 平成27年10月 | 第19回日本遠隔医療学会学術大会（仙台）口頭発表（抄録集pp. 58） | 被災地で母子支援活動を実践しているNPO法人施設への、ICT活用による遠隔地からの支援方法を検討することを目的とし、健康相談を行った。NPO法人施設のスタッフを対象とし、タブレットを使用した健康相談の方法について、面接調査を行い、その結果を質的研究で分析し報告した。[大槻優子、川名ヤヨ子、中田久恵] |
| 8 被災地の母子支援施設に対する遠隔地からの継続的支援方法の検討—第2報タブレット端末を使用した健康相談の結果から— | - | 平成27年12月 | 第19回茨城県総合リハビリテーションケア学会（水戸）ポスター発表（第23巻学術集会特別号 pp. 31） | 母子支援施設のスタッフと、大学教育機関による地域連携・協働による母子支援の必要性和有効性を探るため、タブレット端末を使用した健康相談（以下健康相談）を行った。相談を行った母親から聞き取り調査を行い、タブレット端末使用による健康相談の有効性について質的研究方法を用い分析した。その結果を報告した。[大槻優子、中田久恵、川名ヤヨ子] |
| 9 母性看護学実習における男子学生の性差を考慮した指導方法の検討—実習開始時の心理状態— | - | 平成28年3月 | 第26回日本医学看護学教育学会（島根）ポスター発表（抄録集 pp. 54） | 母性看護学実習開始時における男子学生の心理状況を明らかにし、具体的にどのような指導が必要であるか、その方法を検討するための基礎資料を得ることを目的とし、男子学生にインタビューを行い、質的に心理状況について分析した。その結果、「男子学生であることの中所」「分娩に対する否定的感情」など6つのカテゴリーが抽出された。[額額祐子、中田久恵、大槻優子] |
| 10 産後1か月の母親のQOLと育児不安の実態 | - | 平成28年6月 | 第63回日本小児保健協会学術集会（埼玉）ポスター発表（抄録集 pp. 200） | 産後1か月の母親の開発したQOLスコアの得点差で分類し、育児不安の実態を質的に明らかにした。その結果、初産婦ではいQOL低得点群の方が育児不安を感じる者が多いが、育児不安は高得点者においても存在しておりアンビバレンスな様態があることが明らかになった。[野原真理、中田久恵] |
| 11 Current status of home care in rural areas of Japan -Comparison between male and female caregivers-（和訳：「日本の農村地域における在宅看護の実態 - 男性と女性介護者の比較 -」） | - | 平成28年7月 | 第3回韓日地域看護学会協同学術集会（釜山）ポスター発表 | 農村地域の介護における実態と課題を明らかにする目的で、茨城県内のA町の高齢者の介護経験のある方を対象に無記名式質問にて調査を行った。回答者の80%が介護サービスを使用しており、介護者の性別により、そのニーズや特徴が明らかになった。[大槻優子、仲根よし子、中田久恵、武敏子、渡邊昌宏、額額祐子、島貫秀樹] |

| | | | | |
|--|---|----------|--|--|
| 12 Quality of life and Child-rearing anxiety of mothers at one month post-partum (和訳：「産後1か月の母親の育児不安とQOL」) | - | 平成28年7月 | 第3回韓日地域看護学会協同学術集会(釜山)ポスター発表 | 産後1か月のQOLの高い母親(60名)を対象に育児不安の内容について明らかにした。その結果、子育てで心配なことがある母親は40名(66.7%)、子育ての孤独感がある者は14名(23.3%)、子育ての負担感がある者は21名(35.0%)、母親として不適格と思う者は21名(35.0%)であった。育児不安4項目の具体的内容として「母乳のこと」「夫の協力が得られない」「育児による拘束感」「自分の時間がないこと」「生活の変化」「子どもからの発信を読み取れない」が上げられた。[野原真理, 中田久恵] |
| 13 農村過疎地域における在宅介護の実態 第1報 女性介護者の介護サービスの満足 | - | 平成28年9月 | 第65回日本農村学会学術総会(伊勢志摩)ポスター発表(抄録集 pp.582) | 北関東で高齢化率の高い農村に地域において、在宅で高齢者の介護経験のある女性を対象とし、介護サービスの満足に関する調査を行った。50%の方がサービスに満足しており、サービス提供者間の連携を図ること、介護からの一時的な解放ができるようなサービスを提供する必要があることが示唆された。[中田久恵, 仲根よし子, 島貫秀樹, 額瀬祐子, 武敏子, 渡邊昌宏, 大槻優子] |
| 14 農村過疎地域における在宅介護の実態 第1報 男性介護者の介護サービスの満足 | - | 平成28年9月 | 第65回日本農村学会学術総会(伊勢志摩)ポスター発表(抄録集 pp.582) | 北関東で高齢化率の高い農村に地域において、在宅で高齢者の介護経験のある男性を対象とし、介護サービスの満足に関する調査を行った。55.8%の方がサービスに満足しており、不満を感じている方は17.3%であった。介護を体験した男性は、サービス提供料の不足や政策への不満、経済的な負担を感じていることが明らかになった。[島貫秀樹, 仲根よし子, 額瀬祐子, 中田久恵, 武敏子, 渡邊昌宏, 大槻優子] |
| 15 産後12か月の母親のQOLと育児不安 | - | 平成28年12月 | 第36回日本看護科学学会学術集会(東京)ポスター発表 | 産後12か月の母親(124名)を対象にQOLに関する実態調査および育児不安の内容について研究した。その結果、母親たちはQOLの高低に関わらず、育児不安を抱えていた。特にQOL低得点群の母親は、育児不安の割合が高く、「子育ての負担感」「母親として不適格」なのではないかという思いを抱いていることが明らかになった。[野原真理, 中田久恵] |
| 16. 母性看護学実習における母親学級参加による学習効果 | - | 平成29年3月 | 第27回日本医学看護学教育学会学術集会(和歌山)口頭発表:抄録集 p30 | 母性看護学実習における母親学級への参加による学習効果について明らかにすることを目的とし、学生の「母親学級見学記録のレポート」を質的に分析した。その結果、学生は集団指導への参加により指導者として必要な資質や使用する媒体の活用方法など学んでいることが明らかになった。[大槻優子, 中田久恵, 額瀬祐子] |
| 17. 男子学生の母性看護学実習終了時における心理状態に関する研究 | - | 平成29年3月 | 第27回日本医学看護学教育学会学術集会(和歌山)口頭発表:抄録集 p30 | 母性看護学実習終了時における男子学生の心理状態を明らかにし、具体的にどのような指導や介入が必要であるか、インタビューで得られたデータを質的に分析した。その結果【男性であることによる躊躇】【母性看護学実習に抱く困難感】【分娩に対する否定的感情】【母性看護学実習の達成感】【性差を感じない安心感】などのカテゴリーが抽出された。[額瀬祐子, 中田久恵, 大槻優子] |
| 18. 大学教員と実習指導者による授業の効果 -IBCLC助産師による母乳育児指導から- | - | 平成29年3月 | 第27回日本医学看護学教育学会学術集会(和歌山)ポスターセッション:抄録集p48 | 母性看護学実習で指導をうけるIBCLCの資格をもつ助産師とともに母乳育児の授業を行い、授業の効果が臨床実習においてどのような効果があるのかを明らかにするため、FGDを行い、内容を質的に分析した。学生らは、授業の効果として【演習内容の実践】【教材の有効活用】【指導者の一貫した指導】【生きた看護の学び】などを感じていたことが明らかになった。[中田久恵, 大槻優子, 額瀬祐子] |

| | | | | |
|---|---|----------|--------------------------------------|--|
| 19. Situation of male family caregivers providing home care in depopulate regions | - | 平成29年9月 | 第2回アジア太平洋看護研究学会（台湾）ポスターセッション | 過疎地域における男性の在宅家族介護者が介護を継続するためにどのような要因が関与しているのかを明らかにするため、男性家族介護者に半構造化面接を行った。その結果、【ケアマネジャーの親身な対応】【介護サービス提供者の丁寧な対応】【近隣の家族介護経験者からの情報提供】【性の違いによる日常生活支援の困難感】【認知症患者への対応の戸惑い】等のカテゴリーが抽出された。中田久恵、島貫秀樹] |
| 20. 過疎地域における女性介護者の在宅介護の実態（第1報）在宅介護の継続性に関する要因の検討 | - | 平成29年9月 | 第66回日本農村学会学術総会（沖縄）ポスターセッション：抄録集 p345 | 過疎地域における女性の在宅介護者が、介護を継続するためにどのような要因が関与しているのかを明らかにするため、在宅で介護を経験した女性5名のインタビューを質的に分析した。その結果【介護サービスの有効活用】【夫、子ども、姉妹との協力体制】【介護者自身の時間の確保】【介護に対する知識・技術の必要性】【要介護者と介護者の信頼関係】が要因としてあることが明らかになった。[大槻優子、仲根よし子、中田久恵、島貫秀樹] |
| 21. 過疎地域における家族介護者の在宅介護の認知と介護を可能にする要因（第2報）要介護者と主介護者が母娘関係の事例 | - | 平成29年9月 | 第66回日本農村学会学術総会（沖縄）ポスターセッション：抄録集p346 | 過疎地域において実母を介護する娘が母親の介護に対してどのような認識を持ち、また介護を継続するためにどのような要因が関与しているのかをインタビューから得られたデータを質的に分析した。その結果、実母を介護する娘は自分自身の介護の内容に不円環を感じつつも、母親の在宅介護を自然に受容していることが明らかになった。[中田久恵、仲根よし子、島貫秀樹、大槻優子] |
| 22. 過疎地域における家族介護者の在宅介護の認知と介護を可能にする要因（第3報）要介護者と主介護者が嫁姑関係の事例 | - | 平成29年9月 | 第66回日本農村学会学術総会（沖縄）ポスターセッション：抄録集p346 | 過疎地域において儀保を介護する娘が姑の介護に対してどのような認識を持ち、また介護を継続するためにどのような要因が関与しているかを明らかにするため、インタビューから得られたデータを質的に分析した。その結果嫁は周囲の家族の希望や教育から「嫁の役割」であり、「高齢者との関係が自分や子どもたちの成長につながる」という意識で義母の会とを受け入れていることが明らかになった。[仲根よし子、中田久恵、島貫秀樹、大槻優子] |
| 23. 乳児をもつ母親のQOLと育児不安～縦断的調査～ | - | 平成29年12月 | 第37回 日本看護科学学会術集会（仙台）口頭発表：PD-21-9 | 第1子の乳児をもつ母親のQOLの高低差による育児不安の実態を縦断的に明らかにし、支援の方向性を考察した。その結果から初産婦では「育児で心配なこと」はQOLの高低差に関係なく存在しており、児の月齢が進むにつれてジョジョに減少していた。「孤独感」「負担感」「母として不適格」の育児不安の3項目は、産後6か月や12か月に転機があり、母親のQOLとの関連性が示された。[野原真理、中田久恵] |
| 24. 介護は私の“宿命”と認識する農家女性の在宅介護継続に関する要因の検討 | - | 平成30年10月 | 第67回日本農村学会学術総会（東京）口頭発表：029-1 | 農村過疎地域で義父、義母、夫の在宅介護を経験したA氏が介護は私の“宿命”と認識し、在宅介護を継続している要因をインタビュー内容から、ライフサイクル的な時間実に分類した。A氏の在宅介護の要因は「人に対する感謝の気持ち」「つらい体験を乗り越えた自信」「信頼できる仲間の存在」「サービスの活用」「住環境」にあることが明らかになった。[大槻優子、中田久恵、仲根よし子] |
| 25. 過疎地域で在宅介護を担う農家女性に対するタブレット端末を利用した遠隔支援の試み | - | 平成30年10月 | 第67回日本農村学会学術総会（東京）口頭発表：029-2 | 在宅介護を担う女性に対して遠隔支援方法として「タブレット」端末を使用し遠隔地からの支援を試みた。その実際と課題について明らかにした。高齢者でも操作が簡単なタブレット端末の活用は対面式相談などで表情もよみとるおとができ、対象者にとっては新たなスキルの習得としての喜びや相談日が楽しみに成り得ることが明らかになった。[中田久恵、仲根よし子、大槻優子] |

| | | | | |
|--|---|----------|--|--|
| 26. 在宅介護を担う農家女性に対するタブレット端末を利用した遠隔支援の試み ―相談内容と支援の実際―第2報 | - | 平成30年10月 | 第67回日本農村学会学術総会（東京）口頭発表：029-3 | 在宅介護を担う農家女性に対する遠隔支援方法としてタブレット端末を使用し支援を試みた。その相談内容と支援の実際からタブレット端末を利用した遠隔支援の効果について明らかにした。[仲根よし子、中田久恵、大槻優子] |
| 27. 産後1か月の母親の自覚症状と育児不安の実態～初産婦と経産婦の特徴～ | - | 平成30年12月 | 第38回 日本看護科学学会術集会（愛媛）ポスターセッション：P2-12-37 | 産後1か月の母親の自覚症状と育児不安の実態について、初産婦と経産婦の特性を見出し、支援の在り方を検討した。その結果から産後1か月の初産婦の自覚症状は睡眠不足が最も多い訴えで「母乳のこと」が母親を悩ませる心配ことであり、初めての育児に対するサポートの重要性を改めて示した。[野原真理、中田久恵] |
| 28. 地域-大学連携における思春期保健事業 小学校3年生親子性教育”いのちのたんじょう” | - | 令和元年11月 | 第38回 日本学校保健学会術集会（東京）ポスターセッション | 授業を通し子どもたちは、自分が愛されていること、また命の大切さについて実感することができていた。その結果「自分が生まれて良かった」など自己肯定感を育むことができていると考える。また、保護者のアンケート結果からは、家庭で性教育を行う際の保護者自身の知識不足を感じていると共に、発達段階に応じた継続、かつ具体的な性教育は、学校・外部講師に要望し、家庭での性教育の困難さと限界を感じていることが示唆された。[南雲史代、中田久恵、村井文江] |
| 29. 小学3年生を対象とした親子性教育の取り組み | - | 2022年8月 | 第41回日本思春期学会（一般演題発表） | 親子性教育直後の保護者へのアンケート調査から性教育の実施状況に関連する要因を分析し、報告した。。[中田久恵、南雲史代、村井文江] |